NPO ピースサポート協会

ピースサポートとは「心の平和支援」の願いを込めています

2012 年(平成 24 年)8 月・第 3 号

ニュース 第 3 号

発行　NPO 法人ピースサポート協会
〒379-2143　群馬県前橋市新堀町 190 番地1
TelFax　027-265-2277
E-mail-info@peace-sa.com
http://peace-sa.com

8 月 2～3 日 被災地 石巻,東松島、飯館村へ行ってきました！

＜被災地支援のご報告＞

① 石巻し雄勝町立浜の仮設の皆さんを訪ね、「今年 6 月頃からホタテ漁が始まりました。今朝も 3 時から漁に出かけ、とれたホタテは組合の業者へ 5 時に収めました。」と大変喜んでお話しくださいました。獲れたての貴重なホタテをご馳走してくださいました。漁は始まって元の生活に戻れる保証がありません。その現実を背負っているのに、私たちのほうが被災地の皆さんの明るく前向きな姿に、生きる勇気を与えて頂きました。本当に有難うございました。

② 大川小学校遺族会の武山会長さんを訪ね、遺体捜索支援金をお届けしました。大川小学校の 4 人の子供たちがいまだ行方不明で捜索を続けています。遺族の方にとっては、なんとしても遺体を発見してあげたいと必死な思いで捜索を続けておられます。「写真の後ろは地盤沈下した農地です、この海水をポンプで吸い取り、子供たちの遺体をなんとしても捜索し、ご両親の元へお返ししたいと思います、これが最後の手段です。」武山会長さんのお言葉が心の底に響きました。

③ 東松島市大曲浜の仮設、小野竹一さんを訪ね被害状況をわかりやすく教えて頂きました。
小野さんの近所の嫁さんは震災時に学校から家に着物をとりに来て津波に遭い、車ごと流されたとき大型トラックにぶつかり窓ガラスが割れ、運転手が手を差し伸べてくれ窓から救出されたが、車の中にいた小学生の二人の子供に手が届かず、
「おかあさーん」と叫ぶ声、そのまま流されて遺体で発見されました。お母さんは「なぜ私だけが助かってしまったのか！」と自分を責めてしまう毎日です…。と言われています。
本当に被災者の方々は今も必死に生きておられるのです。

④ 福島県　「帰還困難」飯館村長泥地区国道399号線閉鎖拠点に行きました。
私たちは、南相馬市役所を訪ね、市内の放射能汚染被害状況を聞きました。南相馬市内でも小高地区が帰還困難区域に指定され、すべての民家が避難したとのことでした。　さらに飯館村も原発の放射能汚染被害により居住制限区域となり、畜産農家の家や役場、商店街は誰も住めず避難してしまい廃墟の町でした。
399 号線を進んだ長泥地区は国道が閉鎖され、保安員の方が通行車両の監視にあたっておられました。
閉鎖地点で車内の放射能線量計は＜3.99 シーベルト＞に上がり危険ブザーが鳴り続けていました。
その外で、保安員の方々は防護服を着て一日中働いておられるのです。

今、日本政府では、今後のエネルギー政策方針についての国民アンケートを行っています。
3,11の震災と福島原発の水素爆発から 1 年 4 か月が過ぎた今も、福島県の皆さんは、我が家に帰れず、いつ帰れるかもわからない。
25 年前のチェルノブイリ原発事故の地域では、いまでも放射能に汚染されて約 30 キロ圏内が廃墟になっています。
私たちは、原発の本当のことをもっと学び、放射能の恐ろしさをしっかりと考えて、将来の日本を子孫のために残していく道を正しく判断しなくてはなりません。そんな重大な責任を深く感じて帰ってきました。

元気な雄勝町立浜の皆さまです

大川小学校遺族会武山会長さんへ

小野竹一さんと大曲被災地にて

飯館村長泥地区 399 号線閉鎖

福島第一原発事故で放射能被害を受けている福島県の現状

2011 年 3 月 11 日福島原発事故から家族で避難している小林一行さん

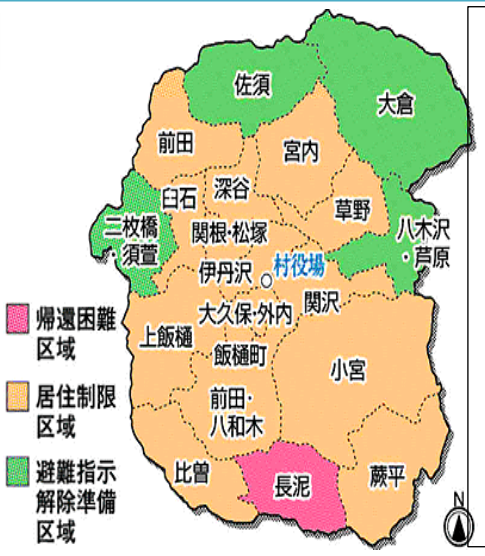
私たち家族は、福島県双葉郡大熊市野上字山神 105 に住んでいました。
そして3,11の福島原発事故から避難してきました！　3 月 11 日の東日本大震災、そして大津波。
私は海岸沿いの富岡駅近くの会場で会議をしていた時です。突然の大地震、15 分間ほどすごい揺れが続き、会議が中止されて急いで自宅に帰る途中には、家が崩れ道路の水道管が破裂していた。
その後会議場や富岡駅周辺のすべては津波にのみこまれ全壊しました。
12 日の夕方になって、「原発事故のため10キルメートル圏内は避難せよ！」と防災無線で町役場からの指示を聞き、詳しいことは理解できずに、妻と共に福島県田村市へ避難しました。さらに 13 日に妹が住む前橋市大前田町に緊急避難しました。そして 24 日に前橋市の支援により広瀬町の広瀬公社賃貸住宅に移らせていただくことができました。福島県内 97,599 人、県外避難者 61,200 人、双葉郡の町の人々は、いわき市や会津若松市、郡山市などへ避難し、いわき市への原発難民が約2万人と聞いています。
長年住んでいた大熊町の我が家は原発から7,5kmのところにあり、原発の放射能で汚染されて近寄れません。その後の一時帰宅は、昨年の警戒区域発令前に2回、そして今年の2月、それでも3回ほど防護服を着て自宅の大事なものだけを取りに行きました。
8 月 8 日に会津若松市で大熊町の会議があり、機関困難区域と居住困難区域の線引きの話がありましたが、いくら平地を除染しても住めるはずがないのです。飲料生活水に使用しているダムの水は放射能に汚染されているのです。なぜ国や役所はそれでも住まわせようとするのでしょうか。福島原発 4 号機は今も放射能漏れしています。簡単には止められないのです。元東電の社員である隣人が「放射能漏れをしているのになぜ住民を帰すのか、人間の命をなんと思っているのか」と言っています。
とにかく原発は止めるしかない。原発に代わるエネルギーを考えるしかないのです。

3 月 14 日午前 11 時 1 分福島第一原発 3 号炉が水素爆発ではなく水蒸気爆発もしくは核爆発した瞬間

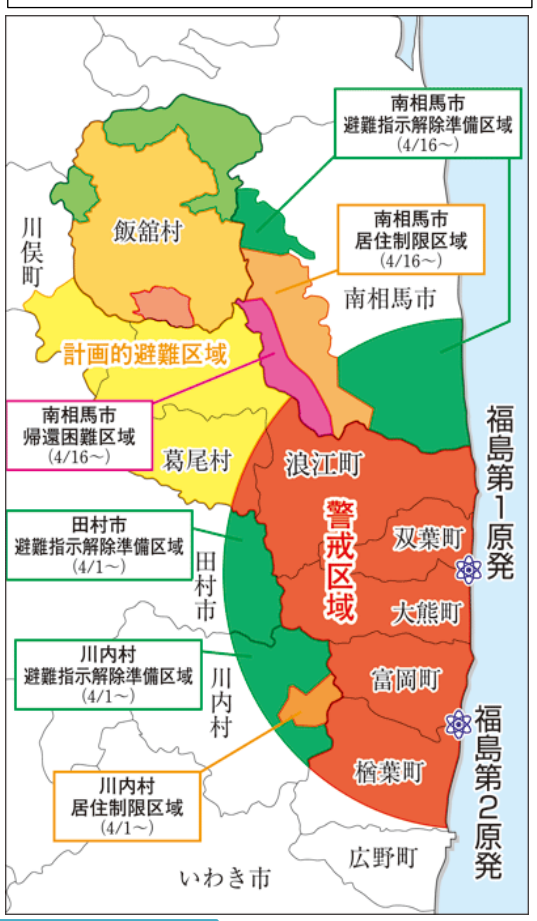
福島原発事故が原因で 2 か月間で 160 人の自殺。

福島県相馬市の酪農家自殺、「原発なければ」と書き残し

『福島第一原発の事故で、牛を処分して廃業した福島県相馬市の酪農家男性(50歳代)が「原発さえなければ」と書き残して自殺していたことが13日、わかった。　関係者によると、男性は今月11日、小屋で首をつった状態で見つかった。小屋の壁に白チョークで「仕事する気力をなくしました」「残った酪農家は原発にまけないで」と記していた。
男性が住む地区は当初、加工前牛乳が出荷停止となり、男性は乳を搾っては捨てていた。今月初旬までに約30頭を処分した。
男性は親の代から酪農を続けており、姉は本紙の取材に「(弟の死は)子どもたちのことを思えば話したくない。しかし、原発の件は訴えたい」と語った。
酪農家仲間だった男性(51)は「避難区域ではないため、補償はないだろうと繰り返していた」といい、農業男性(53)は「連絡をとるたびに『原発ですべてを失った』と悩んでいた」と話した。 』　　2011 年 6 月 14 日(火) 読売新聞



政府は(2012年)7月17日午前0時、東京電力福島第1原発事故で全村を計画的避難区域に指定していた飯舘村を「帰還困難」「居住制限」「避難指示解除準備」の3区域に再編した。



福島県須賀川市で24日朝、野菜農家の男性(64)が自宅の敷地内で首をつり、自ら命を絶った。 福島第一原発の事故の影響で、政府が一部の福島県産野菜について「摂取制限」の指示を出した翌日だった。震災の被害に落胆しながらも、育てたキャベツの出荷に意欲をみせていたという男性。遺族は「原発に殺された」と悔しさを募らせる。 自宅は地震で母屋や納屋が壊れた。 ただ、畑の約7500株のキャベツは無事で、試食も済ませ、収穫直前だった。遺族によると、男性は21日にホウレンソウなどの出荷停止措置がとられた後も「様子をみてキャベツは少しずつでも出荷しないと」と話し、納屋の修理などに取り組んでいた。
23日にキャベツの摂取制限指示が出ると、男性はむせるようなしぐさを繰り返した。「福島の野菜はもうだめだ」。男性の次男(35)は、男性のそんなつぶやきを覚えている。「今まで精魂込めて積み上げてきたものを失ったような気持ちになったのだろう」 男性は30年以上前から有機栽培にこだわり、自作の腐葉土などで土壌改良を重ねてきた。 キャベツは10年近くかけて種のまき方などを工夫し、この地域では育てられなかった高品質の種類の生産にも成功。農協でも人気が高く、地元の小学校の給食に使うキャベツも一手に引き受けていた。「子どもたちが食べるものなのだから、気をつけて作らないと」。
そう言って、安全な野菜づくりを誇りにしていたという。　　2011 年 3 月 29 日朝日新聞

自殺した男性が作ったキャベツ畑

特集① 福島第一原発事故の現状と私たちの未来は？

燃料プールから未使用燃料の試験的取り出しが行われた
福島第１原発４号機＝2012 年 7 月 18 日午後 0 時 55 分

東電の“安全宣言”と相反する福島第一原発4号機の危険な現状

週プレ NEWS 2012 年 7 月 9 日(月)（取材／興山英雄、有賀　訓）

平成 24 年 7 月5日、福島第一原発事故に関する最終報告書が事故調査委員会によって衆参両院議長に提出され、「事故は、自然災害でなく明らかに人災だった」と結論づけられたことで大きな波紋を呼んでいる。東日本大震災という自然災害による揺れと津波。
だが、事故をここまで拡大させてしまったのは東京電力、および政府の対応に問題があったということだ。
東電は6月25日、水素爆発により原子炉建屋が破損した福島第1原発4号機の耐震性について「問題ない」とする報告書を経産省の原子力安全保安院に提出した。だが、はたしてその報告は信用できるのか。
元東芝・原子炉格納容器設計者の後藤政志氏がこう話す。
「政府は昨年12月、原発事故は収束し、原子炉は『冷温停止状態』にあると宣言しましたが、とんでもありません。損傷が激しい1～4号機は予断を許さない状況が今も続いています。そのなかでも、最も危険なのが4号機。水素爆発で原子炉建屋の屋根は吹っ飛び、壁の一部は崩れ落ち、ひしゃげた鉄骨がむき出しになっています」
震災前から原発の運転停止などを訴えてきた元スイス大使で東海学園大学名誉教授の村田光平氏も、こう続ける。
「4号機の5階には燃料棒など数多くの重たい機材が置かれ、事故直後から復旧作業に当たっている業者の話では、重さは1800tにも及ぶそうです。それらのすべてが、地上30mの5階部分で宙づりになっているのが現状。しかも下層部は事故で耐震強度が弱まっている。もう一度大地震が来れば、建物の崩壊は避けられません」
万が一、4号機建屋が崩壊したらどうなるのか。村田氏は「被害は東日本だけにとどまらない」とみる。
「実は、4号機から50mほどの場所に1号機から6号機の共有の使用済み核燃料プール（「共用プール」）があり、そこには6375本もの燃料棒が保管されています。至近距離にある4号機建屋が崩壊すると、その影響で共用プールの冷却機能が停止するなど深刻なトラブルにつながりかねない。そうなれば膨大な量の放射能が放出され、日本に住めなくなるのみならず、地球規模の大惨事に発展する危険性も否定できません」　想定外の事態を予測できない東電の“安全宣言”など、鵜呑みにはできない。

福島第1原発:4号機燃料　試験取り出しを開始　【放射能漏れ】未使用燃料取り出しへ

毎日新聞　2012 年 07 月 18 日

東京電力は18日午前、福島第1原発4号機の使用済み核燃料プールに保管している未使用燃料2本について、試験的な取り出し作業を開始した。東電は、燃料の腐食や破損の状況を調べたうえで、来年末までに本格的な燃料回収に着手する方針だ。事故後、燃料を取り出すのは初めて。　東電は「核物質防護上、スケジュールなどの詳細は答えられない」としている。回収作業は、建屋上部の核燃料プール近くに設置した仮設クレーンを使い、水面から約7メートル下にある核燃料を取り出す。燃料は専用の輸送容器に入れ、クレーンで地上に降ろして原発敷地内の共用プールへ運ぶ。未使用燃料は使用済み核燃料より発熱量が小さく、放射線量も低い。4号機は事故当時は定期検査中。1～4号機では最多の1535本（うち未使用燃料204本）の核燃料が残っている。事故直後のプールへは冷却のために海水が注入されたほか、水素爆発に伴うがれきが沈んでおり、燃料の損傷状況を把握することが急務となっている。

福島原発事故がこれほど深刻な状態であることを国民は知らない！

米国の原発専門家原発コンサルタント　**アーノルド・ガンダーセン氏、** 8月16日の「日刊ゲンダイ」に緊急警告！

アーノルド・ガンダーセン氏は次のように警告している。
原子力発電に携わってほぼ40年になります。全米70カ所の原発で運営・管理した経験をもとにお話しします。
まず日本の方に大変重要なことをお伝えしなければならない。それは福島第1原発の4基すべてから、いまだに放射性物質が放出されているという事実です。　3月中旬の水素爆発で飛散が終わったと考えていたら間違いです。確かに9割はあの時の爆発で放出されたかもしれない。しかし、それで終わりではない。　ですから環境汚染は計り知れないのです。
放出を防ぐには、建屋を覆いかぶせるテントなどを使わない限り無理です。
物理的に阻止できるまで、今後も数カ月間は放射性物質が飛散すると考えて下さい。
　もう一点、大事なことは汚染水が建屋の最下層から地中に流れ出ていると考えられることです。誰一人として肉眼で確認はできませんが、これは確かなことだと思います。　炉心は溶融して格納容器の底から建屋の下にまで落ちていると考えられる。
日本政府は炉心を取り出すまでに今後10年はかかると言っていますが、炉心を取り出す技術などありません。
　スリーマイル島事故の時は燃料は溶けて原子炉の底に落ちましたが、福島の場合は一番底までメルトスルーしたのです。これは建屋の下の土壌と地下水が汚染されたということで、一度高濃度に汚染された土壌は今後300年は消えません。　周辺住民の避難指示は半径20キロでは不十分です。
最低でも40キロというのが私の考えです。残念ながら日本政府はその数字を信じようとしません。悲しいことです。　あまり煽（あお）りたくありませんが、今後10年でがんを発症する人は100万人単位になるかもしれません。最初の5年で甲状腺がんや甲状腺異常が顕著になります。次に50キロ以内の地域で肺がんの発症率が今よりも20％上昇するでしょう。この数字はノースカロライナ大学の免疫学者スティーブ・ウィング助教授が算出した数字です。　そして10年で骨腫瘍や白血病、肝臓がんも増えてくると思われます。
　福島の現状というのはこれくらい深刻なのです。日本政府は十分にこのことを肝に銘じて、スピーディーな対応を取ってほしいと切に願います。

広島原爆の日:市民を守るエネルギー政策を平和宣言で訴える

一前文略一　2011 年 3 月 11 日は、自然災害に原子力発電所の事故が重なる未曾有の大惨事が発生した、人類にとって忘れ難い日となりました。今も苦しい生活を強いられながらも、前向きに生きようとする被災者の皆さんの姿は、67 年前のあの日を経験したヒロシマの人々と重なります。皆さん、必ず訪れる明日への希望を信じてください。私たちの心は、皆さんと共にあります。　あの忌まわしい事故を教訓とし、我が国のエネルギー政策について、**「核と人類は共存できない」**という訴えのほか様々な声を反映した国民的議論が進められています。
日本政府は、市民の暮らしと安全を守るための**エネルギー政策を一刻も早く確立**してください。
また、唯一の被爆国としてヒロシマ・ナガサキと思いを共有し、さらに、私たちの住む北東アジアに不安定な情勢が見られることをしっかり認識した上で、核兵器廃絶に向けリーダーシップを一層発揮してください。
そして、原爆により今なお苦しんでいる国内外の被爆者への温かい支援策を充実させるとともに、「黒い雨降雨地域」の拡大に向けた政治判断をしてください。　私たちは、今改めて、原爆犠牲者の御霊に心から哀悼の誠を捧げるとともに、この広島を拠点にして、被爆者の体験と願いを世界に伝え、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に全力を尽くすことを、ここに誓います。　　平成 24 年 8 月 6 日広島市長　松井一實

「核と人類は共存できない！」　今こそ自然エネルギーへの転換を目指しましょう！

NPO 法人ピースサポート協会理事長　久保田光明

今から 67 年前　広島、長崎に原爆が投下され、多くの被爆者をだして苦しみを乗り越えてきました。そして 25 年前のチェルノブイリ原発事故では、今でも 30 キロ圏内では人が住めません。
これは原爆の死の灰の量に比べて、原子力発電所が溜め込んでいる死の灰の量が、一つの原子炉で 1,000 倍もあり、地表の汚染が比較にならないからです。
福島第一原発事故の場合、いまも原子炉の安定化は行く末が見えず、4つの炉の放射性廃棄物が今後も継続的に放出されて降りかかってくるという現実があります。
今年の 8 月 10 日琉球大学の研究グループが、昨年の福島原発事故から放射性物質の影響で蝶の羽や目に異常が生じていると発表されました。　私たちはいまや被曝と隣り合わせの生活を強いられることになりました。現地だけではなく日本中が放射能と付き合う以外にない生活となっています。　未来をつなぐ子孫のために平和な地球を守らなければなりません。
　このような現実を踏まえ、私たちは**「核と人類は共存できない」**という真実を学びあい、**今こそ自然エネルギーへの転換の必要性**を学び伝えていきましょう。
NPOピースサポート協会は、このニュース機関紙やホームページに掲載し、さらに元気セミナーの生涯学習会や支援活動報告会を開催してまいります。　皆さんと共に一緒に歩みましょう！

あなたも一緒にサポーターになりましょう！（年一口￥3,000）

皆さん、世界中の平和への大きな希望を持ちましょう。
私たちの善意のまごころ支援が、海外の子供たちへも届くのです。東日本の大震災も世界中の国々から支援を寄せて頂いています。今や地球家族なのです。
私たち日本人も、思いやりの心を行動に表す時なのです。
ピースサポート協会は多くの皆さんと共に、思いやりあふれる家庭や社会を拡げ、東日本の被災された方々や、海外の貧困生活に苦しむ子供たちへの支援を推進して行きたいと願っています。
どうぞ皆さん、一緒に平和支援のサポーターになりましょう。

私たちは戦争のない世界の平和を願っています。
多くの人の幸せのために支援の輪を拡げています。

NPO法人　ピースサポート協会

事務所　〒379-2143 群馬県前橋市新堀町 190 番地1
Telfax　(027)265-2277　　携帯 090-1113-9200
E-mail info@peace-sa.com　http://peace-sa.com